

竜樹の論書に言及される法相について (一)

八 力 広 喜

竜樹造とされている論書のうちで従来より真作として真憑性があると思われるものはターラーナータなどチベツト所伝の「五如理論聚⁽¹⁾」としてあげられているものである。現在では竜樹の真作として、いわゆる「五如理論聚」のほかにさらに五部の書⁽²⁾、つまり『宝行王正論』『四讚頌』『因縁心論』『遷有論』『勸誡王頌』を加え、最近の業績である『菩提資糧論⁽³⁾』を加えて合計十一部を認める。このほかに竜樹の著作に帰せられているものは多数あるけれども、諸々の点において疑問の多いものとして真偽の判定ができない。

例えば、Venkata Ramanan⁽⁴⁾ は竜樹の著作とされるものをその内容によって六種に分類し、最初に有部に対する批判書として五部を掲げている。即ち『中論』『廻諍論』『壹輪盧迦論』『十二門論』『空七十論』がそれであり、これらのうち『中論』『廻諍論』『空七十論』は問題がないとしても、他の二論は現在では竜樹造として問題を含むものであり必ずしも認めることができない。V. Ramanan の分類において有部に対する批判書というのは、これらの論が有自性論者に対して縁起無自性空の理論を宣揚していることによるものといえることができる。しかし、嚴

密にいうならばこれらの論は有部に対する批判書とのみいえない面がある。

先に筆者は『中論』に言及される部派——犢子部、正量部の思想について二、三検討したことがあるけれども(5)、『中論』ではこれら二部派のほか外教に対する批判と考えられる偈も含まれ、また周知のごとく『廻諍論』『広破論』などはニヤーヤ学派の思想についての論難としてすでに諸学者に注目されているものである(6)。このように竜樹の論書には当時の種々な思想が論形成の背景にあるものと考えられるが、これらの諸思想のうちで当時最も強大な勢力をもっていたのが説一切有部であり、この有部の思想が竜樹の論書に強く影響を及ぼしているものと思われる。このようにみてくると、『廻諍論』はニヤーヤ学派に対する直接の論難の書というよりは、むしろ当時の有自性論者一般——ニヤーヤ学派をはじめ説一切有部も——に対する論難の書と理解すべきであるという見解(7)もとられるのである。

それでは、先に規定した竜樹の論書のうちで有部の法相に関連をもつものがあるかどうかということになるのであるが、有部の術語として多く見出すことは可能であるが、竜樹の教理的理解が不十分であるのか、有部の法相がまだ発展途上にあるものかなかなか決め難い問題である。論書に言及される教理が有部のものばかりでないことはいうまでもないが、特に有部の教理、法相であると予想されながらそれが十分に言及されていないという場合もある。

なお、ここにいう「法相」とは、主として有部で用いられるところの、例えば、玄奘訳『大毘婆沙論』巻一の最初に

「以_二何義_一故名_二阿毘達磨_一。阿毘達磨諸論師言。：尊者世友作_二如_レ是說_一。常能決_二擇契經等中諸法性相_一故。：(8)」
といわれているところの「諸法の性相」という意味である。諸法はある具体的な性相をとってあらわれる。つまり具体的な「すがた」をもってあらわれる。従って『俱舍論』におけるような五位七十五法という法分類が可能となる。そしてこの有部において法相としてあらわれる個々の諸法が、竜樹の論書の中でどのように言及されているかということについての検討である。

本稿ではひとまず『中論』『廻諍論』の中から例を引いて検討したい。

まず『中論』第一章「縁の考察」第二偈(9)には次のような句がのべられる。

「四つの縁は、因(縁)と縁(縁)と次第(縁)とそして増上(縁)とである。第五の縁は存在しない。」

とあって「四縁」について言及されている。周知のとおり縁をいくつかに分類することはすでにパーリの論書以来なされていること(10)であり、有部ではふつう「六因四縁五果」として因縁が整理されているが『中論頌』では「四縁」についての言及だけである。『俱舍論(11)』第六、第七(梵文第二章)には「六因四縁五果」について説かれていることはよく知られているけれども『中論頌』は「四縁」のみの言及にとどまっている。このことについてシチエルバッキ(12)は竜樹時代には「六因」説がいまだ成立していなかった、としているが、この点についてどうであろうか。

渡辺棟雄博士によれば、「六因四縁」類似の思想は上座部七阿毘曇論中においてはじめて説かれたものであって、これらの論から次第に有部の「六因四縁」説となってきた(13)とされている。有部の六足・発智七論中「四縁」は

『施設論』中に

「縁有_二四種_一。如_二施設論及見蘊弁_一。然施設論作_二如是說_一。有_レ法是因縁彼亦是等等無間縁亦是所縁縁亦是増上縁。乃至有_レ法是増上縁彼亦是因縁亦是等無間亦是所縁縁₍₁₄₎」
として説かれている。

また「六因」説は『発智論』中に

「有_二六因_一。謂相応因。乃至能作因。云何相応因……云何俱有因。……云何同類因……云何遍行因……云何異熟因……云何能作因……₍₁₅₎」

として説かれており、また『八犍度論』には

「有_二六因_一。相応因共有因自然因一切遍因報因所作因₍₁₆₎」
として見いだすことができる。

一方、木村泰賢博士は、「六因」説について、「大体上、迦多衍尼子の大成にかかることは疑いなしとしても、それは迦多衍尼子の新考案であるか、はた、前々より何ほどが出来かかっていたものを迦多衍尼子が大成したのであるかは不明に属するのである。発智論を見るに『有_二六因_一。謂相応因乃至能作因。云何相応因……』_(大正二六・九二〇頁下)とあって、如何にもこの六因なるものが已に成立していたのを単に説明するに過ぎぬかのごとき口吻で説いているところを以ってすれば、必ずしも迦多尼子を以って、その創始者と定めかねるものがある。しかし、彼以前において何人がそこに至るまでの材料を準備して置いたかということになれば、少しも分からぬので、所詮、

その成立の事情なるものは、少なくとも今のところ、遂に有耶無耶にならざるを得ぬのである。」とのべ⁽¹⁷⁾。「四縁」説は小乗論部ばかりでなく大乘教にも依用されるものである。そして「四縁」説は巴利文、漢訳阿含中には見いだし得ないが、少なくとも有部所伝の三蔵中に「四縁」の分類が經説の形に整理されてあったことは疑いないものとしてゐる。

また、水野弘元博士は⁽¹⁸⁾、この論をさらに進めて「四縁」の先駆的な思想は、中期アビダルマの『識身足論』⁽¹⁹⁾三にあり、「六因」説は『識身足論』⁽²⁰⁾四にあるとされ、「四縁」に続いて、眼識等の過去、現在、未来の時間的同時異時の相互関係を論ずるところにすでに俱有・相応・同類・異熟の四因があり、後に同類・遍行の語が見えるので「六因」中五因までが『識身足論』中にあり、能作因も五因以外のものとして当然予想されうるものとしている。「六因四縁」は『大毘婆沙論』第二十一⁽²¹⁾、『俱舍論』第六、第七⁽²²⁾、『発智論』第一⁽²³⁾、『大智度論』第十七⁽²⁴⁾、第三十二などに説かれてゐる。

このように諸学者の説をみると、竜樹の時代に「六因」説が成立していなかったという説は訂正しなければならぬであろう。『大毘婆沙論』以前の成立ということが明らかとなっているからである。

それではなぜに『中論頌』に「六因」が言及されないかという疑問が残るのであるが、例えば、漢訳『般若灯論』に「釈曰。因縁者。謂共有自分相応遍報等。五因。縁縁者。謂一切法。次第縁。除_ニ阿羅漢最後所起心心数法。増上縁者。謂所作因無第五。」⁽²⁵⁾

とあり、正確に「六因」を説くわけではないが一応関説しているのにたいし、ほかの註釈には特別の言及がないよ

うに思われる。チャンドラキールティは「六因」説は契経説ではないという立場から、
「かくの如くであるから、敵者は聖教の意趣を明白に理解したものである。何故ならば如来は正理と撞着する言葉
を説かないからである。そして聖教の意趣についてわれわれはすでにそれを指示した。」⁽²⁶⁾

とのべ「四縁」の言及とその否定でよいとしている。この立場は『大毘婆沙論』第十六の
「然此之因非契経説。契経但説有_二四縁性_一」⁽²⁷⁾
という考え方も共通するものである。

このほか『中論頌』には法の生起に関連して生住滅の三相⁽²⁸⁾について言及している。有部は生住異滅の四相を説くなど『中論頌』の理解と相違しているものもある。これらの点についてはすでにふれたこと⁽²⁹⁾があるのでここでは言及しない。

さて次に『廻諍論』について検討したい。

『廻諍論』第七偈は

「法の部位に通じた人々は、善である諸法には善の本体があると考え。その他（の諸法）に対してもそれぞれ
の（本体の）配分がなされている。」⁽³⁰⁾

とあり、註釈の部分は

「この世において、法の部位に通じた人々に百十九の善なる法があると考えている。」⁽³¹⁾

とあって百十九の法のリストが掲げられている⁽³²⁾。竜樹の論書の中で諸法のリストとして掲げられているものは、

作者に疑問のもたれている『十住毘婆沙論』⁽³³⁾をのぞいて恐らく『廻諍論』のこの部分が顯著なものであろう。そこでこのリストはどのようなものを背景にしているかということが問題となるのであるが、この点は明確になしえない。『廻諍論』は明らかに百十九という諸法の数を表示しているが、これらの諸法はいわゆる五位七十五法にいわれる諸法分類とは一致しないものである。『廻諍論』には「善なる法」という限定がつけられているけれども、アビタルマの中では善法の定義はどうであらうか。

例えば『法蘊足論』卷八に善法・不善法の定義について、善法は、
「云何善法。謂善身語業。善心心所法。善心不相応行。及擇滅是名善法。」⁽³⁴⁾
とあり、

『品類足論』卷六は

「善法云何。謂善五蘊及擇滅。」⁽³⁵⁾

とあり、

『大毘婆沙論』卷第五十一中引用の『集異門足論』には

「何故名善。答由此能引可愛可喜可樂悅意如意果。故名善。此顯等流果。復次由此能招可愛可喜可樂悅意如意異熱故名善。」⁽³⁶⁾

とあり、同じ『大毘婆沙論』卷五十一⁽³⁷⁾には四種善についての分別論者の異説を紹介している。

ところで『廻諍論』の諸法のリストは、いわゆるこれら有部にいう善法の定義の中に入るものとは考えられず、

竜樹の論書に言及される法相について (一)

このリストは何を基準にして掲げられているか明らかでない。『法蘊足論』中に定義せられている、心心所法とか心不相応行法などに入るものがわずかに指摘することができる。また『俱舍論』において整理された五位七十五法の心法で大地法に入るものとして、受・想・覚・触・観察・欲・信解脱・精進・憶念・三摩提が掲げられ、大善地法に入るものとして、信・希淨・内信・勤・慚愧・捨・不貪・不瞋・不癡があり、不相応行法に相当するものには得・生・住・滅・集・老・無想定があり、その他善法として熱惱・悶・覆・愁惱・求不得・荒乱・懈怠・憂憤等が掲げられるのは適切でない。また大煩惱地法、大惡地法、小煩惱地法の諸法を否定したものもあり、さらに分類不能なものもあって、かなり未整理のままに百十九掲げられている。このリストは漢訳・梵本・チベット訳それぞれ異同があるけれども、いずれも未整理であることにはかわりがない。『廻諍論』成立の時期において法分類がまだ確立していなかったとは考えられず⁽³⁸⁾、あるいは竜樹の見たリストが不整備であったのか、この部分だけから決定することはできない。ただ、竜樹の時代と『大毘婆沙論』成立期とほぼ同時期とみるならば、法分類の未確立によるものとはいえないのでなからうか。

以上、部派それも有部の法相として考えられるものについて、きわめて簡略であるが検討してみた。部派的な法相として端的にあらわれるのは『廻諍論』におけるリストが最も典型的なものと思われる。ただ、『廻諍論』の諸法は竜樹が何を手がかりとしたか残念ながら不明である。ただ、後に『俱舍論』において整理されてゆく諸法のいくつかが掲げられているから、諸法分類以前の法の羅列ともうけとられるのである。しかし、竜樹自身はもともと個別の法を重要視しないという態度をとっていたとも考えられる。それは『宝行王正論』⁽³⁹⁾の次のような句からも

窺い知ることができるのである。

「諸要素が個別に自性をもって存在しないならば、個別の自相がどこに存在しえようか、個別に自性をもって存在しないものをいかに多く集めても（自性は）存在しないが、諸法の自相を世俗として説く。」⁽⁴⁰⁾

「色・（声）・香・味・触などの諸法においても同じ道理であり、眼・識・色なども、また無明・業・（苦の）生存なども（同じである）」⁽⁴¹⁾

「作者・業・所作・数・所存・因・果・時・長短などの所知・名・名をもつもの（など）も同じである。」⁽⁴²⁾

註1 「五如理論聚」(Pañca-yukti-kaya) とは

1. Mūla-madhyamaka-kārikā 『根本中頌』
 2. Yukti-śāstika 『正理七十論』
 3. Śūnyatā-saptati 『空七十論』
 4. Vīgraha-vyāvartani 『廻難論』
 5. Vaidalya sūtra and prakaraṇa 『広破経及び論』 Tāranātha は以上の五部を認め、(A. schiefner 独訳本 p. 302. Lama Chimpa. Alaka Chattohadhyaya 英訳本 pp. 385~7) Bu ston はこれに Vyavahāra-siddhi を加える (Bu-ston 仏教史 五一頁。鈴木学術財団。)
- なおこれらについて詳細は R. H. Robinson : Early Madhyamika in India and China. The University of Wisconsin Press. 1967. pp. 26~7 ; T. R. V. Murti : Central Philosophy of Buddhism. London 1955. pp. 87~91 ; K. V. Ramanān : Nāgārjuna's Philosophy. Tokyo 1966. and Indian ed. 1971. pp. 34~7 ; 参考。
- 2 五部の書名の順に 1. Ratnāvalī 2. Catuḥ-stava. 3. Pratitya-samutpāda-hṛdaya 4. Bhava-saṁkrānti-śāstra
 5. Suhrillekha を含む。ビブリアオグラフィイは省略する。

竜樹の論書に言及される法相について (一)

- 3 瓜生津隆真『菩提資糧論』の竜樹真撰について」印仏研十七ノ二、六八頁。
- 4 K. V. Ramanan. op. cit, p. 36. "Texts that constitute chiefly a critical examination of other schools, especially of the sarvāstivāda doctrine of elements."
- 5 拙稿『中論』に言及された部派の思想」武蔵女子短大紀要第五号、一九七二／三
- 6 宇井伯寿「正理学派の成立並びに正理経編纂年代」『印度哲学研究』一二〇五頁以下。山口益「廻諍論について」『山口益仏教学文集』下、七頁以下。
- 7 山口益、前掲書。一〇頁。
- 8 『大正蔵』二七、四頁上。
- 9 catvārah pratyayā hetuś cālambanam anantaraṃ / tathaiṣādhipateyaṃ ca pratyayo nāsti pañcamah // rkyen
nams bsi ste rkyu daṃ ni / dmigs pa daṃ ni de ma thog / dbaṅ po yaṅ ni de bzin te / rkyen lna pa ni yod na yin //
なお『十二門論』觀緣門第三にこの偈が引用されている。
- 10 『発趣論及びその註』(Tikapāthāna)の二十四縁が最も有名である。
- 11 『大正蔵』二九、三〇頁上以下。六因について。三六頁中以下、四縁について。梵文では pradhan 本八二頁、九九頁。
- 12 Th. Stcherbatsky : The Conception of Buddhist Nirvāṇa. Leningrad, 1927. pp. 164~5 n. 6 再刊本 The Conception of Buddhist Nirvāṇa with Comprehensive Analysis and Introduction. India. p. 254. n. 3
- 13 渡辺棋雄『有部阿毘達磨論の研究』一六〇頁。
- 14 『大正蔵』二七、一〇八頁下。なお、「大毘婆沙論等に顕はれたる施設論断片」国訳一切経 毘曇部三の附録参照。
- 15 同右二六、九二〇頁下。
- 16 同右二六、七七四頁中。
- 17 『小乗仏教思想論』一三七―八頁。
- 18 「縁について」『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』三一頁。アビダルマの因縁の展開について詳細な検討がなされている。

- 19 『大正藏』二六、五四七頁中以下。
- 20 同右二六、五四七頁下以下。
- 21 同右二七、一〇四頁下以下。
- 22 註11参照。
- 23 『大正藏』二六、九二〇頁下以下。
- 24 同右二五、一八七頁上以下。同二九六頁中以下。
- 25 同右三〇、五四頁下。
- 26 Prasaṅgapāḍā. (Poussin 刊本) p. 78, (Vaidya 刊本) p. 26.
- 27 『大正藏』二七、七九頁上。
- 28 『中論』第三章の中心問題である。
- 29 拙稿、前掲論文、八一頁。
- 30 Text. P. h. Vaidya (Buddhist Sanskrit Texts No. 10) Madhyamaka śāstra of Nāgārjuna with the commentary : Prasaṅgapāḍā by Candrakīrti に所収のものを使用。
- 31 op. cit., p. 278.
- 32 百十九の諸法のリストは残念ながら、漢訳・チベット訳・梵本で一致しない。因みに列举すると次のようになる。
漢訳は（大正藏三二、一六頁中下。）
「善法一百一十有九。謂心一相」とあり次のように列举する。
受、想、覺、觸、觀察、欲、信解脱、精進、憶念、三摩提、慧、捨、修、合修、習、得、成、弁才、適、勤、思、求、勢力、不
嫉、自在、善弁才、不悔、悔、少欲、不少欲、捨、不思、不求、不願、樂說、不著境界、不行、生、住、減、集、老、熱惱、悶
疑、思量、愛、信、樂、不順、順取、不畏大衆、恭敬、作勝法、敬、不敬、供給、不供給、定順、宿、発動、不樂、覆、不定、
愁惱、求不得、荒乱、懈怠、憂憤、希淨、内信、畏、信、慚、盾直、不誑、寂靜、不驚、不錯、柔軟、開解、嫌、燒、惺、不貪、

不瞋、不癡、不一切知、放捨、不有、愧、不自隱惡、悲、喜、捨、神通、不執、不妬、心淨、忍辱、利益、能用、福得、無想定、不一切智無常三昧、とあり残り十三が欠落している。

梵文は (Vaidya 刊本 B. S. T. No. 10)

viññānasya, vedanāyāḥ, saññāyāś, cetanāyāḥ, sparśasya, manasikārasya, chandanasya, adhimokṣasya, vīryasya, smṛter, samādheḥ, prajñāyāḥ, upekṣāyāḥ, prayogasya, sañprayogasya, prāpter, adhyāśasya, prativiratīḥ, vyavasāyāḥ, (?) autsukyasya, unmmūtsāhasya, avyavartyasya, vasitāyāḥ (?) pratipatter, avipratīsārasya, dhīter, adhyavasāyasya, anauśvekasya, ananummūrdhya (?) nutsārasya, prāpañāyāḥ, prañidheḥ, madasya, visayāñātī, viprayogasya, anityāni (?) katāyā, utpādasya, sthiter, anityatāyāḥ, samarthāgatasya, jarāyāḥ, pratitāsyatārateḥ, vitarkāñātī, priteḥ, pramādasya, aprasrabdheḥ, vyavahāratāyāḥ preṣ (?) praktikūlasya, pradakṣiṇagrāhasya, vaiśāradyagauravasya, citrikārasya, bhakter, abhakteḥ, śūsruṣāyāḥ, sādarasya, anādarasya, prasrabdheḥ, hāsasya, vācaḥ, viṣpadanāyāḥ, siddhasya, aprasādasya, aprasrabdheḥ, vyavahāratāyāḥ, dākṣyasya, sauratsyasya, vipratīsārasya, śokasya, upāyāsāyāsabhi (?) tasya, apradakṣiṇagrāhasya, sañśayasya, sañvarānātī, pariśuddher, adhyāśasya, rūpasya, śraddhā, hrīrārjavamauñcanam, upāśamaḥ, acāpalaḥ, sapramādamārdaraḥ, pratisañkhyānātī, nirvairaparidāhaḥ, amadaḥ, alobhaḥ, adosaḥ, amohaḥ, asadvat, apratinisargaḥ, vibharaḥ, apatrāpyā, aparīśracchadanaḥ, mānanaḥ, kāruṇyaḥ, mairī, adinatādiratama……naḥ, nāhaḥ, alikacetase, utpādanaḥ, kṣāntīḥ, vyavasadu (?) asauryam, bhāgānrayam puṇyaḥ, asaṁjnī, samāpotīḥ, nairyāñikatā, asarvajñātā, asaṁskṛtā dharmāḥ,

チベット訳は (北京版九五卷、五八頁第三葉以下)

nam-par-śes-pa, tshor-ba, hdu-śes, sems-dpaḥ, reg-pa, yid-la-byed-pa, ḥdun-pa, mos-pa, brtson-ḥgregs, dram-pa, tiñ-ñe-ḥdsin, śes-rab, bdan-śñoms, sbyor-ba, yañ-dag-par-sbyor-ba, thob-pa, loag-paḥi-bsam-ba, khoñ-khro-ba-med-pa, dgaḥ-ba, ḥbad-pa, rtsol-ba, rmons-pa-med-pa, spros-pa, gnod-pa-med-pa, dhan-dañ-ldan-pa, khoñ-khro, yid-la-gcags-pa-

med-pa, hdsin-pa, mi-hdsin-pa, dran-pa, brtan-pa, lhag-pahi-shen-pa, rmoms-hbrel, spro-ba-med-pa, mi-rtsol-ba, dan-du-gñer-ba, smon-lam, rgyas-pa, yul-dañ-mi-ldan-pa, ñes-par-ñbyin-pa-ma-yin-pa, skye-ba, gnas-pa, mi-rtag-pa, rga-ha-dañ-ldan-pa, yoñs-su-gduñ-ba, mi-dgañ-ba, rtog-pa, sdug-pa, dan-pa, ñhod-pa, mi-mthun-pa, mthun-par-ñdsin-pa, rjes-su-mi-mthun-par-bzun-ba, mi-ñjigs-pa, she-sa, ri-mor-byed-pa, dad-pa, ma-dad-pa, bsgs-ba-bshin-byed-pa, gus-pa, mi-gus-pa, rgod-pa, ñin-tu-spyañs-pa, ñag-pa, ñgol-ba, grub-pa, ma-dañ-pa, ñin-tu-ma-sbyañs-pa, rnam-par-byan-ba, brtan-pa, des-pa, yid-la-gcags-pa, mya-ñam, ñkhrugs-pa, rgyags-pa, mi-mthun-par-ñdsin-pa, the-thson, sdom-pa, yoñs-su-dag-pa, nan-legs-par-dañ-pa, ñjigs-pa-ñi-phyogs-gcig, dad-pa, ño-tsha-ñes-pa, gnam-po, mi-ñdrid-pa, ñe-bar-shi-ba, rtab-bag-ma-yin-pa, bag-yod-pa, byams-par-lta-ba, so-sar-brtag-pa, yid-byon-ba, yañs-su-gduñs-pa, rgyags-pa-med-pa, chags-pa-med-pa, she-sdañ-med-pa, gti-mug-med-pa, thams-cad-ñes-pa-ñid, mi-gton-ba, ñbyor-pa, khrel-yod-pa, mi-ñchag-pa, ññin-rje, sems-pa-mi-gton-ba, byams-pa, shum-pa-med-pa, dgra-ñral-ba, vjo-ñpñrol, khon-du-mi-ñdsiñ-pa, phrag-dog-med-pa, sems-yoñs-su-gtug-pa, med-pa, bzon-pa, rnam-par-spañs-pa, ñes-pa-ma-pin-pa, yoñ-su-ñoñs-spyod-pa-ñi-rjes-su-mthun-pa, bsod-nams, ñdu-ñes-med-pa-ñi-ññoms-par-ñjug-pa, ñes-par-ñbyin-pa-ñid, thams-cad-mi-ñes-pa-ñid, ñdus-ma-byas-pa-ñi-chos,

なお、梶山雄一博士は各ラキストを校合し、百十九のリストを現代語訳した。(世界の名著二、『大乘仏典』中央公論社) 博士の使用したラキストは E. H. Johnston and Arnold kunst, ed., *The Vighrahavyāvartani of Nāgārjuna with the author's commentary, Melanges chinois et bouddhiques.* Vol. IX. 1951. 及び S. Mookerjee の邦本 (*Nava Nalanda Mahāvihāra Research Publication I*) なおこのほかにも Jayaswal and L. Sankrtyāyana 本、P. L. Vaidya 本がある。

- 33 各所にリストが掲げられるが、一切法の分類などがみられる。(大正蔵 二六、三二頁上中。)
- 34 『大正蔵』二六、四九一頁下。
- 35 同右二六、七二六頁下。
- 36 同右二七、二六三頁下。

- 37 同右二七、二六三頁上。
- 38 福原亮巖「諸法分類の史的展開」竜大編集三五九号、昭三三、一五頁以下。
- 39 テキストは G. Tucci; *The Ratnāvali of Nāgārjuna*. JRAS. 1934. 及び P. L. Vaidya 刊本。ただし、第一章第七十八偈から有偈まで、及び第三章、第五章は梵文欠、従ってチベット訳を参照しなければならない。
- 40 梵文欠落の部分であり、北京版、一二九卷、一七五頁第三葉の五行目。
- 41 同右六行目。
- 42 同右七行目。

付記 この原稿は昭和四十八年十月十三、十四日両日、金沢大学で行なわれた日本宗教学会において口頭発表したものに註記を付し、補正したものである。